

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

演劇空間「スペースベン」

我楽多屋ワールド

△文／スペースベン代表・田中 勉▽

昨年に引続いて、今年の十一月のFANSは、イージーシアター我楽多屋の月間公演「超・我楽多屋」で幕を閉じた。

今回は、それぞれの週の芝居について触れてみたいと思う。

●一週目

「ジュリエットの指輪」

作・演出／長尾広海

昨年の「オフィーリアの花束（ブーケ）」の続編とも言えるこの作品は、財閥の令嬢が誘拐されたところから始まる。いつもの個性的な三人の刑事が登場し、事件解決へと舞台は展開されて行く。その中で、昨今世間を騒がせているような、偽装誘拐であったことが判明してくるのだが、この作品は、演劇性を問うというよりも、娯楽番組

として観た方がなかなか楽しめる。もちろん、現代への批判的な要素もちりばめられているのだが、「我楽多屋」として、本公演では観られない一面が出ていて面白い。なにより役者がこの作品を楽しみながら創りあげているところに好感が持てる。

観客によつては、多少テレビ的だと思ふ方もいたかも知れないが、題名のとおり、「ジュリエットの指輪」という宝石をめぐる展開される舞台は、テンポもよく、さすが、シリーズ化して欲しいとの声も高い、楽しめる作品であった。

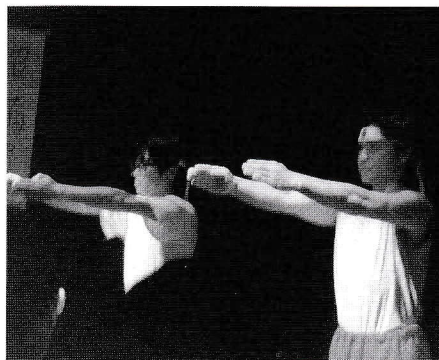
●二週目

「平成8年度成年の集い」

作・演出／平間幸夫

この作品も、状況設定等基本的には昨年の続編作品である。

三畳間の部屋に同居するムサイ三人の男と動物。その三人の係わりと、それぞれの思いとで舞台は展開されていく。昨年と違うのは、その動物がカワウソからウサギに変わっているところ



であろうか。

この作品は、良くも悪くも「平間作品」であろう。毎回のことではあるが三人の男たちは尻を出す。観客の一人が言っていたことが面白かった。「芝居なのだから、ケツではなくて、肛門が見たかった」と。何気ないジョーク的な言葉であるが、平間幸夫ワールドを観客に提示する時の微妙さと、難しさ、その言葉に表れているような気がしてならない。

三畳間に何気なくカワウソやウサギを登場させてしまう平間のセンスと、暴力性、不条理性と日常性に、平間自身が気付いた時、また観てみたい作品である。



●三週目

「25ヴァンサンカン」

～雨上がりにアクセス～

作／外館暢子

演出／館かずと

新婚夫婦と言われる時期を過ぎ、少しのすれちがいを感じながらも生活している妻。パソコン通信等を交え、さまざまな日常を経ながらハッピーエンドを迎える。

はつきり言つてこの作品には甘さが目立つ。25というのは主人公の妻も含め、作者の年齢のことなのであるうが極端な言い方をすれば、その年齢の視

点でしか創り上げられていない脚本である。別な見方をすれば、現在の自分と向き合った、敬虔な作品作りではあるのだが、はたしてそれが芝居として成立するのか。何に關しても演劇における批判性や裂け目を求める訳ではないが日常の生活が繰り広げられていく中でその向こうに何かを見出せなかったのは、私の力不足であろうか。

しかしながら、人と人との出会いがあり、その中で生きていくことは楽しさや苦しみが付きまとい、あやうさの中で生きているあやうさを再認識させられたのは事実である。

●四週目

「天使の食卓」

作・演出／館かずと

両親も亡くなり、交通事故で家族も失って、独りぼっちになった男が、ある日昔住んでいた家を訪ねると、突然父親と母親が登場し、男を夕食へと招き入れる。男は戸惑いながらも少しの会話を交わし、その場を去る。

さらに数日後、またその場を訪れると、今度は両親に加えて妻と子供までもが迎えてくれていた。

題名のとおり、そこにはいつも食卓が用意されているのだが、この「男」はそれには手をつけないところが面白い。いや、もし食べていたとしても、この男は一切拒否しているのである。アパートの隣人の女性との、日常的なシーンを折り交ぜながら展開されて



● 総評 ●

総じて言えば、役者のレベルというか、舞台にのせる創り方は昨年に比べ、はるかに達者になっていると思う。

しかしながら苦言を提せば、作品を創り上げる時の、役者の姿勢というか、脚本、演出への挑み方というものに、もっと鋭さが欲しかった。

皆、性格的に優し過ぎるのかもしれない。

劇団も旗揚げから三年を迎え、円熟もし、逆に言えば劇団運営のさまざまな微妙な問題も発生してくる頃なのかも知れないが、物を創る時の攻撃性・チャレンジ精神は失ってほしくないものである。

来年もこのような楽しい企画ができるかどうかは分からないが、イージーシアター「我楽多屋」の、平成九年以降のさらなる活躍を期待する。

いく舞台であるが、館かずと流の「家族」とは何か、「食卓」とは何かというところを、役者のみならず観客も問われていることは見逃せない。

それは、芝居とは何なのか、芝居で何が出来るのか、館かずと自身と観客への問いかけなのかもしれない。

しかし、亡くなった人達と囲む食卓が「地獄の食卓」ではなくて、「天使の食卓」になるのは、やはりこれも館かずと流で興味深く、面白い。



●五週目

「私の肩でお泣きなさい」

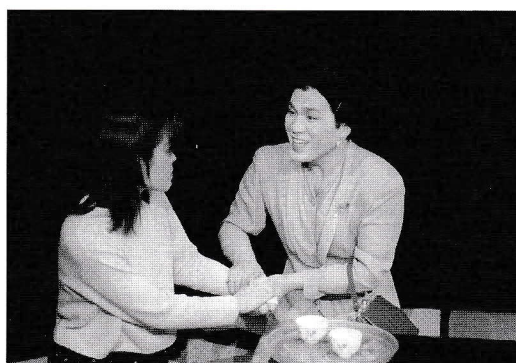
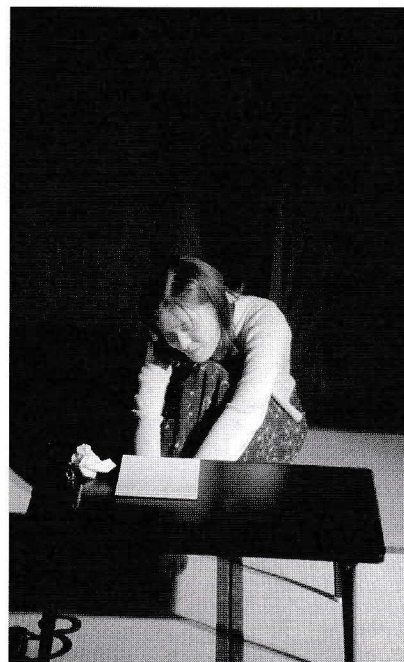
作・演出／長尾広海

恋愛に迷い、一人離れてアパート暮らしを始める女。しかしその部屋は、いわく付きの部屋なのか、前の住人やらその友達やら、隣人が訪れてくる。

しかもこの部屋は西日がきつい。その西日に誘われるように、様々な人が訪れてくるのだが、主人公の「女」はそれを拒否する訳でもなく、受け入れる訳でもなく話は進められ、その部屋で七つの夜を過ごす。

話の内容的にもなかなか面白い。しかし、果たしてこの「女」は実像であったのか？はたまた訪問者達が実像であったのか？それとも全てが虚像であったのか？

いろいろな見方が出来ると思うが、平間幸夫演ずる、「アパートの大家」だけは実像であったような気がしてならない。もしかしたら、大家が所有する、何事も起きていない「ただ西日が強く当たる部屋」だけを一時間少し観せられていたのではないかという、不思議な感じが残った。



一
月の
FANS

※いずれも午後7時30分、入場料500円

●三日

「勝手に新年会」

※FANSを観たことがある方ならどなたでも。

●十日

●十七日

●二十四日

●三十一日

※四週全て、日本舞踊公演の予定になります。

〈問い合わせ〉

〒031 八戸市柏崎1-11-8

TEL&FAX 43-9876



車のご来場はご遠慮ください(近くに西町書店駐車場有)